

## 杉田玄白と前野良沢

1774（安永3）年に、杉田玄白（1733～1817年）と前野良沢（1723～1803年）が、「解体新書」を翻訳出版したことは本誌2013年1月号の本欄で紹介した。

「解体新書」出版は我が国の医学史上画期的な出来事であり、それはまたこの困難な翻訳を成し遂げた杉田玄白、前野良沢2人の先駆者の名を不朽のものにしたが、このとき、良沢は訳者に名を連ねなかった。玄白は良沢に序文を書くように頼んだが、良沢は「名利のために蘭学を学んだのではない、長崎に行く途中で、大宰府天満宮に参拝し、そのことを誓ったから名を連ねることはできない」と断った（二宮陸雄「医学史探訪」医歯薬出版（株））とある。

そして「解体新書」の訳者として名声を得た玄白のその後は、“江戸随一の蘭方の流行医”として終始する。社交性に富み、統率力に恵まれた彼の経営する天真楼塾には大槻玄沢（1757～1827年）をはじめとする蘭学の秀才が集まり育っていった。

一方良沢は、人との交わりも排して蘭学一途に貧しい一学究としての道を歩み、最後は娘婿の家に引き取られて81歳の生涯を終える。

良沢の墓は杉並区梅里の慶安寺にある。「樂山堂蘭化天風居士、享和癸亥歳（1803年）十月十七日」と刻まれている。墓碑の中央に妻の蘭室妙桂大姉（寛政壬子（1792年）2月20日）、左に蘭溪天秀居士とあるのが長男 良庵（寛政辛亥歳（1791年）7月10日）である。良沢が晩年に逆縁の憂き目にあっていることは惻隠の情に耐えない（写真1）。

「訳が天文地理機械の書であれば、少し誤っても補うことができる。しかし医方の書は人命にかかわる故に、ひとたび失して生霊に禍すればあとで救うことはできない。故におそれ慎むべきである」と良沢は考えた。一方、玄白は良沢と違って「全部の語句が判明しなくても、妥当な意味に解することができるならば大要を公表される。例えば飢餓で死が迫って



写真1 前野良沢の墓（杉並区：慶安寺）



写真2 杉田玄白の墓（港区：栄閑院浄寺）

いるのに象の鼻の珍味を探したりしない」と考えた。これは玄白の性格が闊達で融通性が利くためであろう。

玄白は1817（文化14）年4月17日に85歳の高齢でその幸福な一生を終えて芝愛宕下の天徳寺の塔頭 栄閑院に葬られた。九幸院仁誉義真玄白居士という戒名をおくられたが、墓石には「九幸杉田先生之墓」と8文字が刻まれている（写真2）。

良沢も玄白も同時代人として生き、同じように天寿を全うしたが、その生き方は対照的であった。その両典型は、時代が移った現代でも確実に生きている。

吉村昭氏の歴史長編「冬の鷹」（新潮文庫）は、我が国の近代医学の礎を築いた画期的偉業、「解体新書」成立の過程を克明に再現し、両者の劇的相克を浮き彫りにしている。

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕